

環境影響を考慮した費用便益分析の研究（基礎理論研究）

主査 庭田 文近（城西大学助教）

今年度の基礎理論プロジェクトでは、環境影響を考慮した費用便益分析の理論的枠組みの検討を主眼に、上期4回・下期5回の計9回にわたり会合を開催してきた。

地球温暖化問題をはじめとする世界的な環境意識の高まりから、自動車をはじめ交通利用の環境的側面がクローズアップされている。ヨーロッパ諸国では、交通プロジェクト等の評価に際して、大気汚染や生態系への影響を算入する試みがなされてきているが、しかしながら、現在、わが国の道路整備事業の評価に用いられる国土交通省の費用便益マニュアルには、そういった環境項目が盛り込まれていない。

そこで、本プロジェクトでは、わが国の交通政策・交通事業投資に対して、環境影響を考慮した費用便益分析を適用することを念頭に置き、交通による環境費用および環境便益の測定について、イギリスのスターリング大学の Nick Hanley とアメリカのワイオミング大学の Edward B. Barbier が 2009 年に著した *Pricing Nature: Cost-Benefit Analysis and Environmental Policy*, Edward Elgar Publishing. をもとに、環境価値の経済理論・評価手法等を検討するとともに、それをめぐるさまざまな問題を整理することとした。

研究会合では、まず、費用便益分析の基礎的な理論と手法、費用便益分析と環境政策・環境管理との関わり、政策・事業評価における費用便益分析の利用の歴史などについて、上記の書籍の第1章やメンバー各自の論文等をもとに検討し、議論・概念の整理を行った。次いで、同書籍の第2章 *The theoretical foundation of CBA* を取り上げ、關哲雄氏（立正大学経済学部教授）を中心に精読を行い、特に費用・便益評価に関する実務的手法と厚生経済学の理論との関係を検討・確認した。

今年度の研究成果物としては、道路プロジェクトおよび自動車交通による環境影響について、その経済評価手法や価格付け政策に関する議論の整理、費用便益評価の応用の可能性の検討を行った報告書（日交研シリーズ）を作成している。

なお、上記書籍の著者の1人から本研究プロジェクトのメンバーが当該書籍の日本語訳を打診されたこともあり、研究会議と並行してメンバーの分担により本書籍の訳出を進めていたが、日交研双書としての出版が不採択となってしまったため、次年度に再度同翻訳書の出版を申請する考えである。